

初見と夏の訪れですが、今年とこどもたちの思い出となる北海道神宮祭の中島公園での夜店の数々を経験できないのが残念ですね。

残念と言えば、毎年幼稚園の玄関前にある植込みの中の1本の薔薇が咲きほります。今年と楽しみに毎日蕾を確認していました。でも、最近気がつきませんでした。数ある薔薇の内、日に一本づつ折られている事に。世の中には心無い人が居るんですね。

■小学校の低学年のクラスで、こどもたちが先生のお話しを全く聞かず授業にららないクラスがあると聞いたことがあります。

生徒が聞くから授業になり、聞くから理解して吸収するのです。

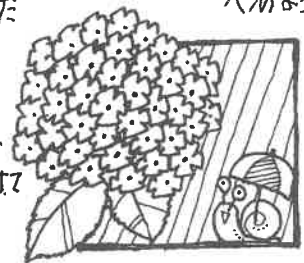
正に自給力は聞く力の総称とこども集団と言えます。

つぼみから年少組へ、そして年中組へ年長組へと力をつけて行って就学へと進みます。

聞く力が育ってくると、理解して吸収して上達します。出来るようになるうれしきなり。

次人の真鍮が湧いてきます。心の育ちに大きな役割が發揮されます。

年長児たちのハーモニカの活動力は設立当からの課題活動です。



ハーモニカは小さな楽器で沢山の穴が並んでいます。その穴を吹く時と吸う時があって音程が違います。口に当てたまま、小さなコンピュータを使って音を探ります。

12月の発表会で毎年年長児100名による合奏でベトナムの「さるこびの唄」などを聞いていただきました。

今年はコロナの影響でハーモニカを自棄しておりますが、これに代ってハンドベルの活動を試みます。

ハンドベルの活動も同じ難しい楽器です。この難しい課題に向かいこども達の表情はしんけんそのものです。

こどもたち一人ひとりに聞く力があるからこそ理解して吸収してくれるのです。

つぼみ・年少・年中の時から積み上げによるものなのです。

(心の育ちシリーズ)

かえ いる 還る家ありますか!

私のカウセリング経験から言うと、「いい子」はどこかで「親を悩ませ」を持っていられます。成績が良いおぼしき、弱音も愚痴を言わない「いい子」ほど見た目は何の問題も無いように見えます。でも、そういう子にも憂いがあったりして親は豹変ぶりに慌てます。こんな「遅すぎる思春期問題」はいい子ほどありますと言っているのは子ども家庭教育フォーラム代表 富田 富士先生で、次ページで続けます。

どんな問題を抱える子でも「親を悩ませよう」とか「先生に迷惑を掛けよう」となつて生まれた子は一人もいません。親や教師にも「悪い子」に育たうと思ってる人は一人もいません。悪い子で生まれた子といえれば「悪い子に育たうと思ってる大人」といえないのに、なぜ悲しい事件や事故が繰り返されるのでしょうか。

一言で言うと、それは「還る家を見失った!」と言った事だと思います。「還る家」とは「ハウス」ではなく「ホーム」の事です。人間関係としての「還る家」の事です。

幼い時どうする事と出来なくて助けを求めた時「大丈夫だよ!おぼしきでいいんだよ」と無条件で抱きかかってくれた実感、受け入れられた実感、それが「還る家」と呼んでいます。

いちどさうさうにも出来ない状態になる事が育ちの途中で感じる事は時折あるでしょう。それを誰かに相談できればおぼしきのですが、誰にも言えなかつたり、苦しみや悲しみをそのまま背負わなきゃならない時もあるでしょう。悩みは「言っと親や先生に話してしまおう」と思われます。そんな時必要なのが「還る家」なのです。「原風景」と言い換えることも出来ます。

「つらい時でもお母さんは黙って受け入れてくれた!」

「父親はずっと私を信じてくれた!」

とこの時の様子をまるで映画のシーンのように思い出させてくれるのが「還る家」になるのです。